

母方の叔父に声をかけられ、創業間もない婦人靴の宮本製靴に入社したのは、昭和22年の12月であった。年は十八歳、弟子入りをするには、少々中途半端な年頃だったようである。事実、私より年下で、一年先輩の兄弟子がいたことで分かった。

入社前叔父からは、「始めの一年間は、泣きごとを言わず、見習小僧になりきって辛抱してほしい」と言われたが、戦争中に一年六ヶ月ほど、社会人生活をした身だけに、屈辱的な思いだけが残った。敗戦を機に、私自身も心機一転するつもりだったので、これは我慢するしかなかった。

入社しても、何一つ仕事が出来たわけではないので、掃除をするか、先輩のお使いをするかして、自分の居場所を確保するしかなかったから、どうも試されていたよう

である。一ヶ月ほどして、製甲ミシン一台の掃除責任者を仰せつかったから、ここでやっと合格したのであろう。

戦前の靴屋さんといえ、お休みは一日、十五日の月二回、戦争中の標語ではないが、「月月火水木金金」が、当り前の話だった。今振り返ってみても、不思議な世界に居たような気がしてならない。

宮本製靴は「ゴールデンシューズ」というネームで、婦人用パンプスをつくっていた。皮革統制、価格統制の時代だったが、つくればつくるだけ売れた時代で、葛飾区立石に工場を持ち、手製の職人さんが常時15人ほどはいた。浅草吉野町（現・今戸）には卸部があって、九州の小売店さんがお得意先だった。銀座には、小規模ながら、二軒の小売店もあって活気付いていた。



写真は、浅草吉野町（現・東浅草）に落成した靴共同会館。地元の靴メーカーが集まって共同の販売店舗が開設された。

都電通りの敷石が、古風で懐かしい。

撮影 筆者。昭和25年頃か。

※浅草吉野町は現在の今戸と東浅草にまたがっていた。